

# 上総地方の横穴墓について

渡 辺 政 治

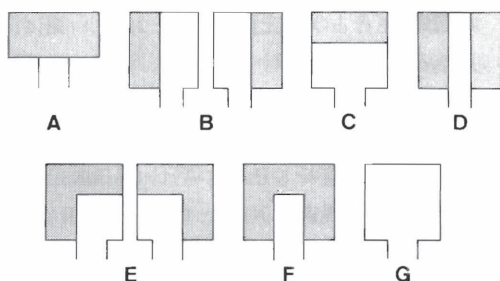
## I

上総地方に横穴墓が多く分布していることは早くから知られており、昭和11年には三木文雄氏によって一宮川流域の押日横穴墓群の詳細な調査と研究が行なわれている(註1)。しかし、その後は長い間まとまった調査や研究はなく、活発に行なわれるようになったのは昭和40年代以降である。昭和4、50年代には、湊川、養老川、一宮川、夷隅川の各河川流域を中心に群単位の発掘調査や河川単位の調査研究が行なわれ、十分とは言えないが上総地方の主要な河川流域の横穴墓の様相が明らかになってきた。ただ、これらの河川流域間の比較検討まで論を進めたものはほとんどなく、僅かに上智大学史学会の「長生郡一宮川流域の横穴」(註2)で、湊川流域岩坂地区の白坂横穴墓群と大満横穴墓群の一部との比較が行なわれているにすぎない。そこでは、岩坂の横穴墓の方が棺台が低く造りが雑であるなどの指적이なされているが、両河川の関連については言及されていない。

本稿ではこれらのことを踏まえながら、西上総の湊川流域と東上総の一宮流域に共通してみられる、玄室全体が高く無棺台無棺床の横穴墓の出現を両流域の編年から考察するとともに、あわせて両河川流域の横穴墓の関連についても考えてみたいと思う。なお、横穴墓の編年は出土遺物や墓道の切り合い関係から考察するのが最良の方法であるが、上総地方の横穴墓は砂岩質の土層に掘り込まれている為、前庭部や墓道が崩壊しているものが多いことと、ほとんど全ての横穴墓が開口した状態で確認されている(註3)ことから、ここでは形態を中心として編年を行なうことにする。また、横穴墓の施設の名称については『山崎横穴墓群』の報文中で用いられている名称を用い、棺台の位置については第1図の分類を用いる。

## II

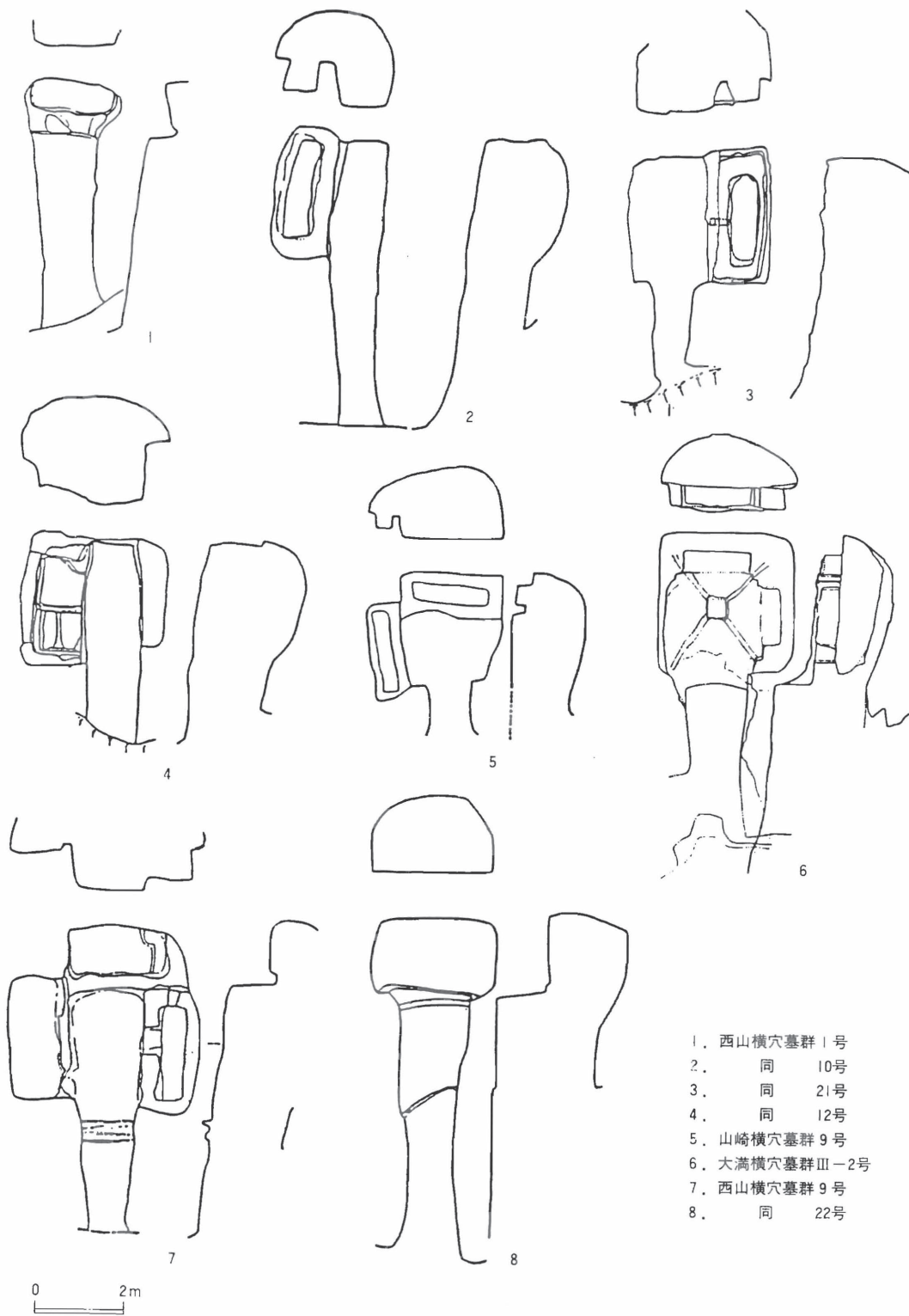
西上総の湊川から小久保川までの地域の横穴墓



第1図 棺台形態

は、ほぼ同様な形態を呈している。その中でも湊川流域は最も横穴墓が集中しており23群 230基以上が分布している(註4)。形態が明らかになっているものも割合に多く(註5)、AからGまでの各棺台の形態が見られる。このうち、AからFまでについては、大満横穴墓群Ⅲ-2号とⅢ-4号(註6)、西山横穴墓群27号以外全て玄室床面と羨道がほぼ同じ高さである。G形態については玄室全体が高いものと、そうでないものがある。

A形態は4基確認されており、そのうち3基に棺床が掘られている。この形態については玄室全体が高い形態の床面に棺床が掘られたものと見ることできるが、西山横穴墓群1号の棺台は他の形態の棺台ほどの幅が少なく、棺台に直接羨道がつながっていると捉えた方がよいと思われる。B形態は棺台を有する横穴墓の中では最も多い形態である。西山横穴墓群ではB形態が3基あるが、うち2基から7世紀と思われる須恵器の坏蓋、坏身等が出土しており同群中では最も古く位置づけることができる。この形態には棺台を右側にもつものと左側にもつものがあり、これについて右棺台の方が上位者であるとする考察もあるが(註1、7)、湊川流域においてはそのような傾向はみられない。D形態は玄室の左右に棺台をもつものであるが、西山横穴墓群12号では右の棺台と左の棺台の整形痕の違いと天井のカーブの度合が変更されていることから、右側の棺台は後から付け加えら

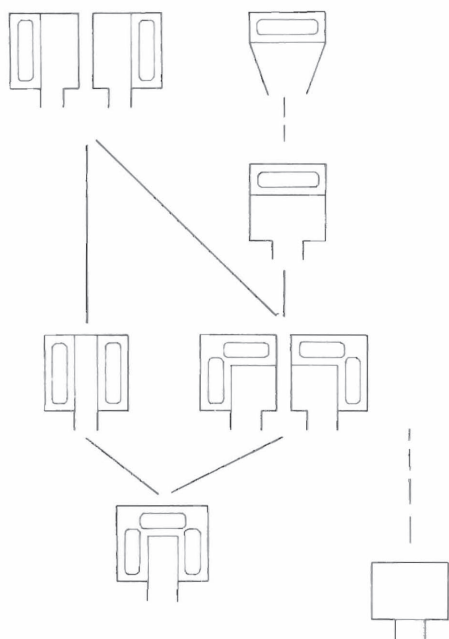


- 1. 西山横穴墓群 1号
- 2. 同 10号
- 3. 同 21号
- 4. 同 12号
- 5. 山崎横穴墓群 9号
- 6. 大満横穴墓群Ⅲ-2号
- 7. 西山横穴墓群 9号
- 8. 同 22号

第2図 湊川流域の横穴墓

れたものであることが指摘されている。なお、この右側の棺台は掘削途中に中止されたものと思われる。E形態のものは10基確認されているが、その中の6基は2つの棺台が各々独立している様に見える、その棺台の位置からほとんどが、奥または側壁沿いのどちらかの棺台が後に付け加えられたものである可能性が強い。西山横穴墓群の28号は、当初B形態で奥壁沿いの棺台を後に造った結果E形態となっている。白坂横穴墓群1号と山崎横穴墓群9号は逆に側壁沿いの棺台部分が拡張されており、掘削当初はC形態であったと思われる。F形態でも拡張によってこの形態となったものが8基中4基ある。うち西山横穴墓群9号では整形の違いから左棺台が後から付け加えられたとされているが、奥壁沿いの棺台と右側の棺台との間に31cmの段差があることから見れば奥壁沿いの棺台も拡張によるものと考えられ、2度にわたる拡張が行なわれていると思われる。他は4形態を拡張したものである。

これらのことからすれば、湊川流域の横穴墓で最も古いものは、単棺台のA形態、B形態で、2棺台、3棺台と多棺化していくと考えられる。これは、単棺台から多棺台への変化という大筋におい



第3図 湊川流域の横穴墓 編年試案

て、上総地方における今までの編年研究と一致する(註7他)。それらの研究のほとんどは、F形態の後に玄室全体が高く無棺台無棺床の形態を位置づけており、橋口定志氏はその発生を「棺座(棺台)が次第に発達していった結果の所産」(( )内筆者)としている。しかし、湊川流域の横穴墓においては、形態からみる限りF形態から直接つながる要素はない様に思われる。湊川流域で最も古い形態と思われるA形態、B形態で棺床の蓋石が検出されており、棺台は造り付けの石棺を意図したものと考えられるが、棺床が簡略化され無棺床に移っていく様な傾向も見られない。また、多棺台化することについて、一つの棺台(棺床)に葬られる者は1名に限定されているという考えを基に、1名→2名→多数と多葬化されていった結果であるとする考察もあるが(註1, 7)、染川流域の神宿横穴墓群では(註8)、B形態の3基で1つの棺床に成人男女、幼児、胎児と一緒に葬られ家族墓的な要素があると考えられることから賛同することはできない。ただ、それに変わる多棺台化の原因については現在の資料では捉えることができない。

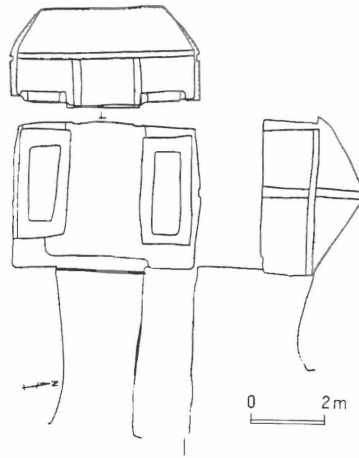
### III

一宮川流域は、上智大学史学会の調査等により本流域と支流合わせて185群710基以上の横穴墓の分布が確認されている(註2)。一宮川流域では、湊川流域で約半数を占めていた玄室床面と羨道がほぼ同じ高さで棺台をもつものが約15%と少なく、逆に玄室全体が高いものは湊川流域で約25%であるのに対して約60%を占めている(註9)。

この玄室全体が高い横穴墓の中で最も整った形態を示すものは、長南町の又富横穴墓群A1号である(第4図)。D形態の棺台を有しているが、湊川流域の様に棺台が玄室の壁についておらず、明らかに棺を模した様に棺台の壁が4辺共きれいに掘り出されている。天井は家形寄棟平入形で玄室の天井や壁には棟木、桁、梁、柱などが表現されている。又富横穴墓群ではもう1基同様な形態のものが調査されているが、棺台は2辺が玄室の壁につき、棟木等の表現は省略されている。玄室全体が高くD形態の棺台を持つ横穴墓は、この他に茂原市の山崎横穴墓群(註10)や長柄町の源六谷横穴墓群(註11)などで調査されている。山崎横

穴墓群では5基が検出されているが、そのうち棺床が掘られているものは35号1基のみで他は両側の棺台共棺床は掘られていない。35号の棺床は深さ10cmで又富横穴墓群A1号の28cmより浅く、この上に蓋をして棺として使うことは難かしいのではないかと思われる。天井の形態は35号を含む3基が家形寄棟平入形で横アーチ、ドームが各1基である。家形寄棟平入形のもは又富横穴墓A1号のものと同様に造りが雑である。これらは、その形態からみて又富横穴墓群A1号の形態に続くもので、棺床は浅くなった後につくられなくなり、天井の形態は家形寄棟平入形からアーチ形へという変化が捉えられる。F形態の棺台を有するものは、山崎横穴墓群で16基が調査されている他、長柄町の鵠谷・鵠谷東部I横穴墓群(註12)などで確認されている。この形態には、3つの棺台、左右両方の棺台、左右どちらかの棺台に棺床をもつものがあるが、奥の棺台のみに棺床が掘られている例は見られない。また、山崎横穴墓群では左右両方の棺台に棺床を有する27号と右側のみに棺床を有する36号は、奥壁沿いの棺台が狭く実際には棺台として使用されなかったのではないかと思われるのに対して、全部の棺台とも棺床が掘られていないものになると、ほとんどが奥壁沿いの棺台も左右の棺台と同じ程度の広さをもっている。これらのことから、この形態はD形態から変化したもので、何らかの理由により奥壁沿いで左右の棺台がつながり、この両棺台をつなげた部分が棺台に発達したものと見てよいと思われる。

その他、一宮川流域では棺台がなく玄室の床面に棺床が掘られているものが多く存在し、山崎横穴墓群の他、三木氏の押日横穴墓群などで調査されている。これには、玄室の左右に棺床をもつ形態と更に奥壁沿いにも棺床を有する形態がある。玄室の左右に棺床を有するものは、その棺床の位置と押日横穴墓群の同形態の天井で家形寄棟平入形から横アーチ形へ変化が窺えることから、やはり又富横穴墓群A1号の形態につながるもので棺台が省略された形とすることができる。3つの棺床を有するものは少ないが、押日横穴墓群2-12号と山崎横穴墓群5号では、奥壁沿いの棺床が小さく、掘削当初においては2棺床であったか、棺床ではなく別の用途があったものと考えられること

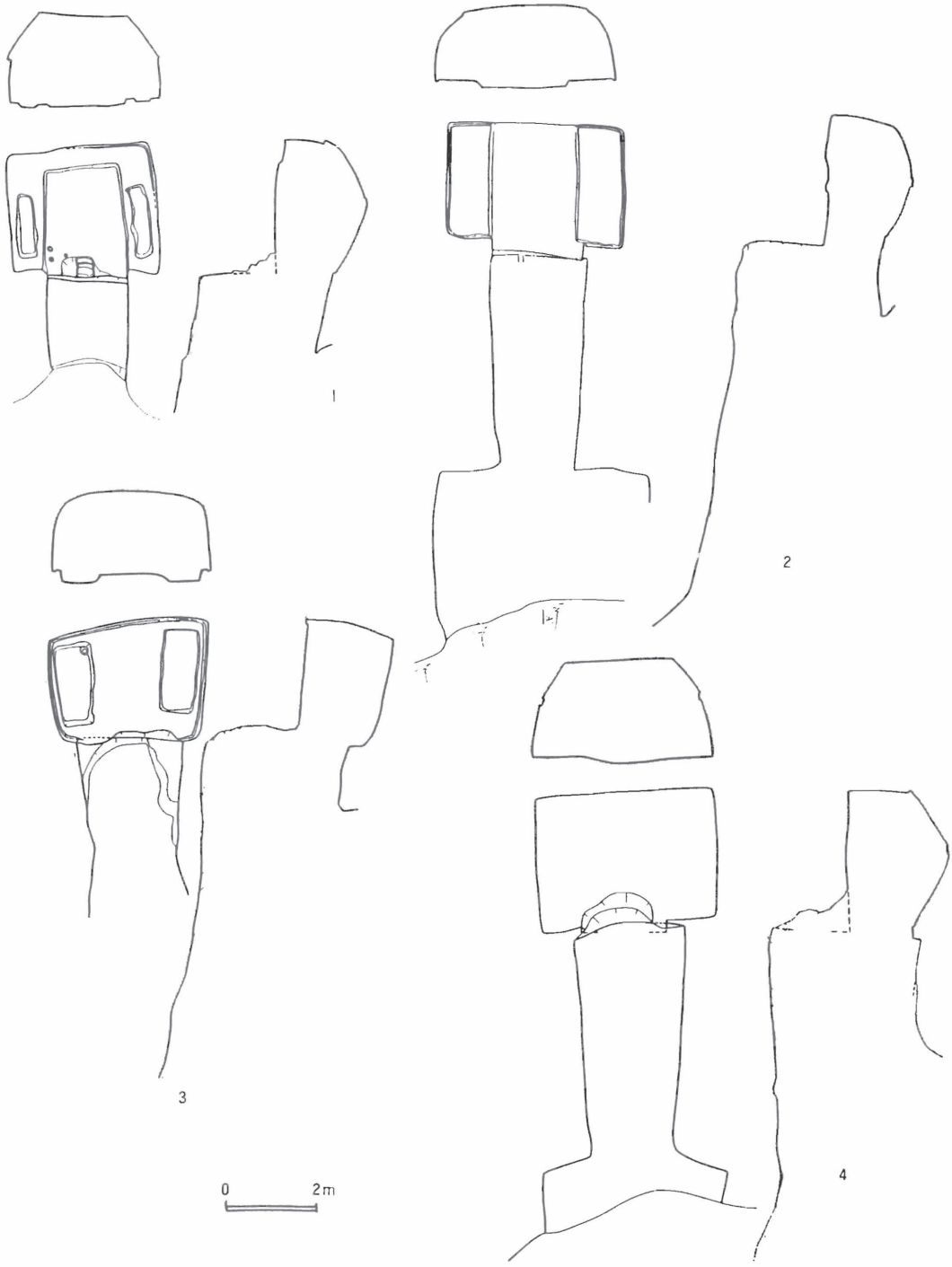


第4図 又富A1号横穴墓

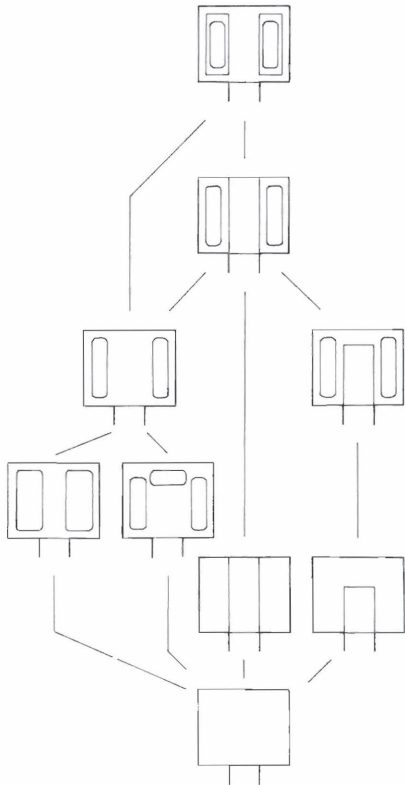
から、左右に棺床がある形態に続くと思われる。そして、棺台を有する形態の棺床が簡略化され無棺床になることからすれば、この玄室の床面に棺床を掘る形態においても棺床が簡略化されていき、玄室全体が高く無棺台無棺床のものに変化していったのではないだろうか。(第6図)

棺床が作られなくなる理由としては、山崎横穴墓群において鉄釘が検出されており、このことから木棺が使用される様になった為と考えることができる。鉄釘は攪乱により形態のわからないものを除くと10基から検出されているが、棺床が掘られていないものはF形態5基とD形態1基の6基で棺床が2つ以上あるものの3基に比べて多く、木棺を使用することによって棺床を掘る意味が薄れ、無棺床に変化していったことが窺える。また、山崎横穴墓群21号は無棺台で両側壁沿いに棺床をもつが、棺台幅が群中の他の棺床より広く、棺床としてではなく木棺を置く場所として使用された可能性が考えられる。

つまり、一宮川流域では横穴墓が造られはじめた当初は、棺床に直接遺体を葬っていたのが、木棺を使用する様になって棺台はその名称通り棺を置く台に変化し、棺床が直接玄室床面に掘られている形態については棺床が広がって棺を置く場所となり、各々が省略されて無棺台のものへ変化していったと捉えることができる。



第5図 一宮川流域の横穴墓  
 1 山崎横穴墓群27号 2. 同34号 3. 同21号 4. 同12号



第6図 一宮川流域の横穴墓 編年試案

#### IV

以上、湊川流域と一宮流域について各々編年を考察してきたが、その結果湊川流域では単棺台から多棺台化していき、一宮川流域では棺台棺床が簡略化されていく傾向が見られた。子細にみれば本稿で取り上げなかった形態もいくつかあり、長柄町の鶉谷・鶉谷東部I横穴墓群では4つの棺床をもつものも見られるが、流域全体の大きな流れとしては前述の通りでほぼ間違いのないと思われる。そして、湊川流域においては形体的にD形態やF形態から玄室が高く無棺台無棺床のものに直接つながっていく様子がないのに対して、一宮川流域では棺床が省略されることからこの形態への変化を追うことができる。このことから玄室全体が高く無棺床の形態は、「棺座(棺台)が次第に発達していった結果の所産」ではなく、一宮川流域で又富横穴墓群A1号に見られる形態からの簡略化によって発生したものであり、湊川流域の同形態は一宮川流域から伝播したと考えることがで

きる。同形態の出現の原因を木棺の使用によるものとすれば、湊川流域においても棺床に直接葬る形から木棺を使用する様に埋葬方法が変化し、それに供なって玄室全体が高く無棺台無棺床のものを受け入れていったのではないだろうか。しかしなぜ木棺が使用されるようになったのかは現在の資料からつかむことはできない。また、筆者の勉強不足の為造り付けの石棺状の施設をもつ形態が分布する他の地域でも同様な傾向が見られるかどうかは分らない。ただ、数少ない遺物から8世紀後半には湊川流域で造られており、一宮川流域で出現したのはそれ以前であると思われる。

湊川流域と一宮川流域は、玄室全体が高く無棺台無棺床の形態が共通して見られるだけでなく、棺台を有する形態においてその配置に共通性が見られる。湊川流域ではIIで記した様にD、E、Fの各形態に、掘削当初はB、C、E形態で後に棺台を付け加えた為D、E、F形態になったものが見られるが、その数はE形態で10基中6基、F形態で8基中4基に及ぶ。D形態はその形態上棺台が付け加えられたと確認するのは難かしいが6基中3基についてその可能性がある。また、初源的な形態と考えられるB形態が多く、棺台を有するA～F形態の中の約44%を占める。後に棺台が付け加えられ他の形態になったものを含めると1形態だけで半数を超えてしまう。初源的な段階でこれだけ多くの横穴墓が作られたとは考えられず、B形態についてはかなり長期間に渡って造られたと思われる。これらのことから湊川流域では、単棺台の形態が基本的に造られ続け、ある時期から棺台を付け加える様になり、その際一宮川流域の棺台配置を模倣したと考えることはできないだろうか。このことは、少数ではあるが西山横穴墓群27号や大満横穴墓群III-2号、III-4号が、一宮川流域程ではないが玄室全体が高く、その上に棺台を有していることから推察することができる(註13)。もし、そうでないとしても同様な棺台の配置が見られるということは、形態が変化していく段階で、両流域の間に何らかの関連があったことを窺っており、玄室全体が高く無棺台無棺床の形態も割と簡単に湊川流域に受け入れられたものと思われる。

確証もないまま、思いついたことを書き連らねてし

まったが、最後に両流域の初源的な形態について少し触れてみたい。湊川流域ではA形態とB形態、一宮川流域については又富横穴墓群A1号にみられる形態が最も古く位置づけられる。これらの形態は他地域から伝播してきたものであり、伝播してきた先が問題となる。湊川流域のA形態とB形態については、池上悟氏が指摘している様に神奈川県内に同様な形態が見られる(註13)。これらのものは石棺状の施設(棺台)の形態が多少違っているが、その位置は同じであり関連が強いと思われる。一宮川流域については斎藤忠氏が静岡県内の横穴墓との係りを示唆しているが、はっきりとはしていない(註12)。いづれにしても近接する地域において全く別の伝播経路によって横穴墓が出現していることは興味深く今後検討していきたいと思う。

#### 註

- 1) 三木文雄「上総国長生郡二宮本郷村押日横穴群の研究」『考古学雑誌』26巻1, 2号, 昭和11年
- 2) 上智大学史学会「長生郡一宮川流域の横穴」『東上総の社会と文化』昭和43年
- 3) 『山崎横穴群』の報文では、玄室全体が高い形態には閉塞がなかった可能性が指摘されている。
- 4) 野中 徹・牛房茂行ほか『西山横穴群調査報告書』昭和52年
- 5) 牛房茂行「湊川流域の横穴群について」『西山横穴群調査報告書』昭和52年
- 6) 岩坂大満横穴群調査団『大満横穴群調査報告

書』昭和48年

- 7) 橋口定志「千葉県・夷隅地域の横穴墓について」—その編年の考察—『物質文化』19号 昭和47年
- 8) 神宿横穴群発掘調査団『神宿横穴群発掘調査報告書』昭和52年
- 9) 註2の統計表から算出したものである。分類の基準が多少本稿と違っている為正確とは言えないが、大きくは違っていないと思われる。
- 10) 及川淳一『山崎横穴群』千葉県文化財センター 昭和57年
- 11) 高橋三男「東上総源六谷横穴群について」『古代』27号 昭和33年
- 12) 斎藤 忠「長柄町横穴群調査報告」『長柄町史』研究編(2) 長柄町史編纂委員会 昭和52年
- 13) 大満横穴墓群では、Ⅲ-2号、Ⅲ-4号を含む最高位置に作られている4基が全て玄室全体が高い形態であり、同群の他のものに比べ整った形態下であることは興味深い。
- 14) 寺田兼方「大庭折戸の横穴古墳」『藤沢市文化財調査報告書』第3集 昭和41年  
三上沢男・大井晴男「諏訪脇横穴群東部分」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』3昭和47年

#### 参考文献

- 1) 野中 徹「東京湾東岸における横穴墳について」『史館』2号 昭和49年
- 2) 高橋在久・渡辺智信「湊川流域の横穴調査概要」『千葉文華』6

(3班 内黒田事務所)